

# 死の谷から来た女

夏樹静子

文春文庫





文春文庫

---

# 死の谷から来た女

定価はカバーに  
表示してあります

1990年10月10日 第1刷

著 者 夏樹静子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-718415-X

文 春 文 庫

# 死の谷から来た女

夏樹 静子



文 藝 春 秋



死の谷から来た女／目次

第一章 洗身メイト

第二章 養女

第三章 翳ある谷

第四章 墜死者

第五章 沈黙の家

第六章 第二の死

第七章 闇のヴィラ

第八章 仮面

解説 赤江 瀑

328 284 243 196 156 126 85 54 7



死の谷から来た女





## 第一章 洗身メイト

## I

「北村さん、北村恵さん、三十三番のお客さまに洗身お願いします」

マイクの声を聞いて、恵はマッサージの手を放した。

といつても、今の相手は本当の客ではない。本職のトレーナー（マッサージ師）からマッサージの手ほどきを受けていたわけで、客の役も朋輩の「洗身メイト」がつとめてくれていた。

「どうもありがとう。また暇があつた時、教えてください」

恵は関西風の訛のある低音の声でトレーナーに礼をいった。先輩格の洗身メイトにもピョコピョコ頭をさげて立ち上り、ピンクのユニフォームを整えて本番の客の前に出る身繕いをした。

「よくマッサージの勉強まで、やるわねえ、メグちゃん」

「とにかくまめなんだから」

女ばかりのトレーナーと洗身メイトの控え室は十二畳ほどの細長い畳敷き。テレビが一台とテーブルがいくつかけ置かれ、冷蔵庫と湯沸かし器など備えてある。テーブルの間に寝そべって、マイクの呼び出しを待っている仲間たちから感心したような声がとんだ。

「このごろなんだか生き生きしてるわね。何かいいことあるんじゃないの」

「ほんと、ほんと。そうしてるとまるっきり小娘みたいだよ」  
大体に自分より年上の女たちの笑い声を背に受け、

「いってきまーす」

と恵は手を振って、受付カウンターのほうへ出ていく。大柄で肉付きのいい身体が引きしまった動きをする。

「三十三番です。あちらですから」

中年女性の係員が待合室のシートを手で示した。サウナから上った客がシートを倒して休んでいるほの暗い待合室には、映画の設備もあり、今は外国のSF活劇を上映中だった。

指さされたシートへ近付いて、

「お待たせいたしました」

声を掛けると、バスタオルを腰に巻いた若い男が上体を起こした。

「あらあ！」

顔を合わせた途端、恵は思わず頓狂な歓声をあげた。

「俵さん……来てくれたのね！」

「指名したんだよ」

「ありがとう。そろそろ電話くれる頃だとは思ってたんだけど」

別のシートでうたた寝していた客がうるさそうな目を向けたので、恵はあわてて俵の腕にかけた指を放した。

「いらっしやいませ。三十三番のお客様お迎えにまいりました」

マニュアル通りの挨拶を小声でいって、案内する形で歩き出す。手首にロッカーナンバーのタ

ツグをはめ、痩せ型の長身にバスタオル一枚巻いただけの俵一敏があとに続く。

「洗い場」はサウナより一階下の七階にあった。

「足元にお気をつけくださいませ」

マット敷きのカーブした階段をおりると、正面に広々とした扇形の浴室が設けられている。暮れたばかりの梅雨空の下、赤坂のホテルの高層ビル群がきらびやかな灯火を輝かせている。

クリームと黒のタイル張りの洗い場には、三十基くらいのカランが円柱に沿って並んでいる。それらの前に先客が二十人余りも掛け、ノースリーブとショートパンツのユニフォーム姿の洗身メイトが一人ずつ付いている。ウィークデイの午後七時台はサウナのラッシュだった。

恵は俵を、あいていたカランの前に掛けさせた。

「先にご入浴なさいますか」

「いいよ、あとからだ」

「では、あかすりに入らせていただきます」

痩せて浅黒い俵の全身に、足から順にお湯をかけ、フレッサーと呼ばれているナイロンのネットを右手に持って、まず耳の裏からこすり始める。

「今日あたりきつと電話くれるだろうと思って待ってたのよ」

浴室では湯や洗面器の音が反響しているので、私語を交しても平気だった。

「あした、六月十三日が君の誕生日だろ。それまでに会いたいと思ってただけど、今日になっちゃったんで、直接来たんだよ」

「うれしいわ、憶えててくれて。——でも、あなたがここへ来るの、考えてみればずいぶん久しぶりみたい」

「そうだなあ……かれこれひと月ぶりかな」

二人が個人的な付き合いを始めてからは、もう半年くらいたっている。

もともと彼は、この高級サウナへ「ゴルデンプラザ赤坂」へ来るふつうの客だった。高級といっても、ここにはサウナのモーニングサービسمたいな千円のコースから、サウナ＋洗身＋マッサージ＋整髪＋ドリンクで合計六千円というVIPコースまで各種揃っている。

彼は昨年十一月頃から、サウナだけか、サウナ＋洗身の三千円コースを週に一回くらい利用し始めた。勤め帰りらしく、たいてい六時半まえに来て、七時すぎにはサウナから上って洗い場へ廻ってきた。

一方、恵の勤務は午後二時から十時までで、偶然も手伝って彼に付く機会が二、三回続いた。恵は彼が来始めるひと月ほど前に洗身メイトになったばかりの新米だったから、まだ緊張して、手つきもぎこちなかったのだらう。それが伝わったのか、逆に彼のほうからくつろがせるようなことを掛けてくれた。

四回目には彼に付いた時は、彼がいつになく遅く、九時半すぎに浴室の待合室へ姿を現わした。

「やあ、君はこんな時間でも働いてるの。今日は会えないだろうとあきらめてたのに――  
迎えに来た恵を見て、彼は意外そうに目を見張ったものだ。」

「私、毎晩十時までなんです。お客さんこそ、今日はぜひぶん遅くにいらしたんですね」  
「残業があったもんだからね。――十時までか。じゃあぼくで最後くらい？」

「そうなると思います」

約二十分の洗身が終って、浴室を出がけに、彼が恵の耳許で囁いた。

「よかったら、いっしょに飯でもどう？ どうせこれからなんでしょ」

「ええ……」

「じゃあ……ぼくもまだだから」

にわかに全裸の恰好が照れ臭そうに、目のやり場に困っている彼の表情がほほえましくて、恵は抵抗なく頷いてしまった。

それが個人的な付き合いの最初だった。本当に裸しか知らなかった彼の背広姿を見て、勤め先や名前を聞いたのも、その日がはじめて。赤坂一ツ木通りの洒落た繁華街にジングルベルが流れ出した十二月十三日のことだったことも、恵ははっきり憶えている。

年が明けると、彼はサウナへ来るのを週二回に増やし、洗身メイトには恵を指名した。先客でふさがっていれば、ほかのメイトがいても断って待っていてくれた。

二回に一度は仕事のあとで夕食に誘われるようになった。そんな時恵は、浴室の掃除当番を同僚に替ってもらい、勤務時間が終わるのを待ちかねて、約束の喫茶店へ駆けつけた。俵はたいいて隅の席で、重そうな専門書を読み耽<sup>ふ</sup>っていた。

そのうち、二人が会うのは、なにも俵がサウナへ来る時だけとは限らない、という話になった。むしろ、そのために彼が頻繁にサウナへ通い、余計な金を使わせるのが、恵には心苦しくなった。付合っているうちに、俵が地質関係の技術者で、サラリーも安く、地味な生活をしているらしいと察しられてきたし、洗身メイトは歩合制ではないから、彼がいくら指名してくれても恵の収入が増えるわけではない。

三月頃から、彼がゴールデンプラザへ電話してきて、デートの約束をするようになった。恵の勤めが終る十時すぎに、赤坂見附の地下鉄の駅に近い喫茶店で落ち合い、たいていは渋谷へ行った。赤坂や青山より、渋谷のほうが店の種類も多いし、飲食費が安くてすむ。焼き肉屋や、さほど高

級でない中華料理店で、恵は俵にご馳走になった。

食事のあとでは道玄坂やその近辺をぶらついて、坂の途中にあるラブホテル地帯の前を通過する足どりが、度重なるにつれて微妙にゆっくりとなっていた。

俵がとうとう恵の肩を抱くようにして、中の一つへ連れて入ったのが、四月なかばのいかにも春らしい空気の甘い夜だった。彼は、地味な勤め人風の見かけからでは意外なほど、濃密な情熱で恵を燃え上らせた。

デートの回数が増えるほどに、それと反比例して、俵がサウナの客になることは減り、近頃ではひと月一回くらいになっている……。

あかすりがすんで――

「では、石鹼に移らせていただきます」

タオルに石鹼をつけ、さっきと同じ要領で耳の裏から首筋、背中と洗っていく。

腹の下までくると、

「大事なところはどうぞ自分でお洗いください」

ふつうの客ならそこでタオルを渡すのだが、恵はいうだけいって、さりげなく洗い続けた。どうせ隅々まで知っているんだから――。

自信のような快い気分が湧いている。俵も軽く手をそえるていどで、されるままになっていた。いったん入浴させ、つぎには上半身に粗塩をかけてマッサージする。洗髪、髭剃りをして、もう一度湯に浸てくると、洗身コースは終りだった。

「あちらでお身体をお拭きいたします」

「ああ、サッパリした。やっぱりたまにはやってもらうもんだな」

俵は心地よさそうに背筋を伸ばして浴室を出たが、そこで多少表情を改めた。  
「あとで待ってる。話があるんだ、今夜は」

## 2

赤坂見附の駅の裏側に当る細長い喫茶店へ恵が駆けていくと、突当りの席で、こちらを向いて本を読んでいる俵の姿が目に入った。

グレーの背広に紺系統のネクタイという、いつもの地味な身なりだった。身体と同様に顔も瘦せていて細長く、鼻筋が通っている。頬骨はやや高くて、眩しそうな細い目がくぼんでいる。いちばんの印象は真面目な勤め人という感じだが、多少神経質そうに見えたり、またどうかした拍子には現代風のちょっとニヒルな好男子と映らないこともない。

これでナウい服でも着れば、案外ひきたつものかもしれないけど、二、三枚の似たような背広を交互に着ているようでは冴えないわね――

恵は自然と微笑が湧き出す顔でそう思った。

俵もすぐに気がついて、部厚い本を閉じて鞆にしまった。

「お腹がすいただろ。すぐ飯に行こうか」

「ええ、いいわ」

俵は伝票をつまんで急いで立ち上った。それでコーヒー代は一人分ですむ。いつもの呼吸だ。今夜も地下鉄で渋谷へ出た二人は、駅の北側に急速にひらけた盛り場の中の中華料理店へ入った。二回ほど来たことのある店だった。二人でビールを一本飲むのも、慣わしになってきた。

「誕生日おめでとう」

俵がグラスをあげて、細い目で掬いとるように恵を見た。

「ほんととは明日だけど、十三日の金曜だろ。それで今日にしたんだ」

「ありがとう。そんなことまで。——でも、十三って数、私には案外縁起がいいみたいよ。あなたに最初に食事を誘われたのも十三日だったし」

「明日でいくつになるの」

わざと大したことでもないように訊く。

「二十六よ」

「十三の倍数だな」

奇妙なようだが、二人はまだ互いの齡をはっきり聞いたことがなかった。

「あなたは？」

「三十九」

「ほんと？」

「ほんととは二十九だ」

「二十九で……まだ独身？」

これは一度聞いたことを確かめている。

「ああ、目下の時点ではね」

俵は含み笑いをした。

食事が終る頃、

「今夜は君を連れていきたいところがあるんだけど。君さえよければ……」



「どこ？」

「ぼくのアパート。あんまり汚かったから今まで躊躇<sup>ためら</sup>ってただけど、この間の日曜に大掃除しておいた」

「まあ……」

「誕生日のプレゼントもあげたいし、大事な話もある」

ドキリとした動悸の波が恵の胸を横切った。「大事な話」とは、もしかして……？

思わずうれしさを胸をしめつけられたが、同じくらいに戸惑いも混っていた。

この人は私のことをどのくらい知っているんだろう？

「——あなたのアパートって、どこ？」

「下北沢の駅から歩いて五分くらいかな。便利な代り、古くて汚い上に家賃が高いんだ」

下北沢という町の名は聞いたことがあるが、恵にはその場所や環境などは想像がつかなかった。

「東京は住居費が高くてねえ。だから社宅があれば助かるんだけど、うちみたいな中小企業ではそれも望めないしな」

俵一敏の勤務先は「日本地質コンサルタント」といって、土木や鉱山関係の地質調査を請負う会社だそうであった。溜池のビルの中にあり、社員は三十人ほど。ほとんどが技術者で、彼もその一人である。独り暮らしのアパートから毎日溜池の会社へ通勤しているということは、恵もすでに聞いていた。

北村恵といえば、昨年九月末に、職安の紹介でゴールデンプラザ赤坂へ就職した。一週間のトレーニング期間をへて、洗身メイトになることが決まると、四谷にある寮の一室を当てがわれた。1DKで二人住まいだが、家賃が一万五千元というのは、都心部に近いふつうのアパートと